

〈象徴形式の哲学〉の形成と感性論

喜屋武 盛也（沖縄県立芸術大学）

二十世紀前半に活躍したエルンスト・カッシーラー（1874-1945）は、主著とされる『象徴形式の哲学』に 1920 年代を通じて取り組み、「言語」（1923）、「神話的思考」（1925）、「認識の現象学」（1929）の三巻を刊行した。この執筆期間はハンプルクで活動していた時期と重なっている。カッシーラーは美術史家のザクスルやパノフスキーらとともに、ヴァールブルク文化史文庫の活動に参加しており、文庫での講演、紀要に掲載された成果も少なくない。したがって、理性の批判を文化の批判へと拡大することを企図した彼の哲学の形成のなかで、芸術は決して瑣末な対象ではなかったはずである。しかしながら、芸術についての巻は、当初計画されていたものの断念されたままとなり、芸術についてのまとまった記述がなされるのは、ようやく晩年の『人間』第九章においてである。

ただし、言語や神話、あるいは認識が主題となっている場合でさえ、感性的な意味の世界の豊潤さやイメージのもつ創造性が議論の根幹を成している点は注目に値する。つまり、明確な芸術論ないし美学の形態をとらないまでも、彼の文化哲学の方向性そのものに感性論、あるいは美学的思考とも呼ぶべきものが介在していると考えられるであろう。本発表は、そうした観点からカッシーラーの 1920 年代の哲学の形成をたどり、彼の文化哲学の進展を検証するための一助とする。

第一巻「言語」とほぼ同時期に執筆されたヴァールブルク文化史文庫講演「精神科学の構造における象徴形式の概念」（1923）では、言語、神話、芸術、認識が象徴形式として挙げられている。各象徴形式の背後には、それぞれ個別の学問が存在しており、カッシーラーは言語学、神話学などそれら学問領域の同時代的成果を基礎に置き、時間、空間、数などの諸関係が、様相を変化させながらあらゆる形式中に見出されることを確認する。芸術もまた、それら形式の一つとして議論の一端を成している。

第二巻から第三巻に向かう途上で、こうした形式の並列的な構造に加えて、そうした形式自体の生成発展に対する観点が明確化される。神話から言語や科学的認識が形成されるにいたる理念的な展開が構築されると同時に、そうした形式の展開を支えている、表情（Ausdruck）、表示

（Darstellung）、純粋な意味（reine Bedeutung）からなる象徴の形成作用の三つの次元が付け加わる。それに応じて、第三巻「認識の現象学」では「象徴的懐胎」（symbolische Prägnanz）という概念が提出され、感性論的な考察は一つの到達点を迎える。至極単純な感覚的経験のなかにすでに、どれほど含蓄に富んだ意味の世界への可能性が内在しているのかが、ゲーテやゲシュタルト心理学の成果を援用しつつ、議論されるのである。